THE ORIGIN OF G-3

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥ　ＯＲＩＧＩＮ　ＯＦ　Ｇ－３

【Ｎコード】
Ｎ６２３６Ｏ

【作者名】
神崎はやて

【あらすじ】
Ｇ－３システム。

それは、警察が開発した、対未確認用の秘密兵器。

これは、そのＧ３を開発した女性と、１人の英雄の物語である。

『未確認生命体出現。各員は、速やかに現場に急行せよ。繰り返す――――――』

無線を通じて、未確認生命体の出現を告げるアラートが鳴り響く。

無線から漏れるそのけたたましい音に、コンビニで昼を買い、パトカーに戻ったところであった女性は、運転席に座ると溜め息をつきながらそれを聞く。

最初の未確認生命体とされる1号が現れてから、既に何十回と聞いてきた、この言葉。

今や未確認生命体は雑誌にも載るほど世間を騒がせている。

市民にとっては面白い話題の種としか見ない者もいるかもしれないが、自分達警察関係者にとってはたまったものではない。

銃を尽く跳ね返し、通常火器では太刀打ちすることすら許されないその異形達は、まさに脅威。

唐突に襲われる市民も危険ではあろうが、それと面と向かって戦わなければならない自分達にとっては、悪夢としか言い様がなかった。

だが、それでも希望がないわけではなかった。

未確認生命体４号。

俗には？４号？などと呼ばれることの多いこの存在は、まさに人類

の希望と呼ぶに相応しかった。

華麗な体術と技で未確認達を倒していく様は、警察にとってはまさに希望そのもの。

当初は少なくなかった敵意も今ではすっかり形を潜め、彼はすっかり英雄となっていた。

「４号、か……」

女性自身は、４号に会ったことはまだなかった。

未確認関連の事件には以前から多く駆り出されているのだが、前線に出ることが少ないからかもしれない。

まあ、研究者として招かれている自分が前線に出ることなど、天地がひっくり返ってもありえないかもしれないが。

だが、今彼女は手詰まりだった。

いくら考えても、彼らの強靭な体に対抗するだけの発明が思い浮かばない。

人間が扱う以上、それは人間が扱える範囲を超えてはならないし、数が必要とあらば、万人に対応しうる装備でなければならない。

せめて、４号に会って体を解析することが出来れば、道は開けるかもしれないのだが――――――。

程なくして未確認を取り逃がした、という連絡が無線越しに入り、溜め息をつくと、女性は署へ戻ろうとパトカーを走らせた。

そもそもこのパトカーも遠出のために無理を言って借りただけであるため、返さねばならないのだ。
なるべく早く返せと五月蝿く言っていた刑事の顔を思い出し、苦い顔をしながらも職場への帰路につく。
何気なしに人通りの少ないトンネル内を通っていた、その時――――。

「きゃっ！！！？」

突然車体を襲う、衝撃。
顔を上げてみると、窓越しに、黒い体をした異形――――――未確認の姿が見えた。

「み、未確認生命体！？」

先程、取り逃したと言っていた1体かもしれない。
そう思い、慌てて女性は車から出ようとする。
だが、シートベルトがひっかかってしまい、思うように外へ出ることが出来ない。
その間にも未確認は拳でフロントガラスを叩き、亀裂を生じさせていく。
パトカーの強化ガラスが、未確認のたったの数撃で、まるで木の板か何かのように簡単に破られていく。
もうだめだ。

そう思い、目を瞑った――――――その時だった。

「グガッ！？」

奇妙な声をあげ、未確認が吹っ飛ぶ。

そして、先程までその異形が乗っていたフロントガラスの先には――――――別の異形の拳。

紅いプロテクターのついたその拳で、力強く未確認を突き飛ばし、女性の命を守ったのは――――――。

「未確認生命体、４号……！？」

今まさに話題となった、未確認生命体４号だった。

紅い鎧のようなボディに、同じく赤で特徴的に大きい複眼。

間違いない、彼こそが４号だ。女性はそう確信した。

「逃げてください！」

「貴方、言葉が！？」

前もって、４号が人語を理解できるらしいことは聞いていたが、あまりに唐突であったためその事実も忘れて叫んでしまう。

だが４号は女性の叫びに答えることはなく、果敢に未確認へ向かっていった。

起き上がった未確認の拳を受け止め、がら空きの胴へ拳を叩き込む。

「グ、ガガ、クウガ！？」

たたらを踏んだ未確認は何事か発した後、今度はベルトのようになっている腰の装飾から、何ものかを取り出した。

やがて未確認の手に収まったその何かは、変形し、剣のような形を模った。

「剣！？」

４号が一瞬驚きを見せ、しかしその後は何事かを思ったか、自身が乗ってきたバイクへ戻り、スタータースイッチとなっているらしいキーを抜いた。

そして。

「超変身！」

叫ぶと、重厚なメロディともに、４号の姿が段々と形を変えていく。

装甲のようになっているボディはより重厚な銀に紫のラインが入ったものに変化。

そして特徴的な複眼もまた、紫色に変わっていた。

手に持っていた、ピックのようになっているバイクのキーが、一振りの剣に姿を変える。

未確認が走り来る。

その手に持つ剣を構え、４号を狙う。
だが、４号は動じることはない。
否、それどころか、構えることすらしていなかった。
未確認の剣が振り下ろされ――――――直撃した。
「っ！！？」
やられた。
そう思い、女性は苦い顔をする。
しかし、それは杞憂だった。
「グガガガっ！？」
再び奇妙な声をあげ、驚きを露わにする未確認。
それはそうだろう。
仕留めた、そう確信した獲物が、目の前で傷１つなく仁王立ちしていたのだから。
呆然とする未確認を他所に、４号が動いた。
剣で未確認の得物を跳ね除け、袈裟懸けに一閃する。
「ガガガッ！？」
華麗な剣技。

それでいて力強さを失わない一閃は、未確認を吹き飛ばすに充分すぎるほどだった。

それと同時に、４号の色が再び赤へと戻る。

情熱の赤、燃えるような赤。

様々な形容の仕方はあれど、４号の赤の呼び名にはただ１つ――――。

「おりゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

――――？希望の赤？こそ、相応しい。

次の瞬間には、燃えるような炎を滾らせた４号の跳び蹴りが未確認へ炸裂し――――。

苦しげな呻き声をあげながら、未確認は粉々に爆散していった。

「……」

女性は、声も出なかった。

初めて間にあたりにした、４号、そして、未確認との戦い。

その全てを間近で見ながら、女性はただそれに見惚れていた。

そして４号がバイクへ跨ったところで漸く我に返り、

「待ちなさい！」

叫んだ。

ここで聞いておかねば、後悔すると思ったから。

４号が振り返る。

その紅い大きな双眸で、こちらをじっと見つめている。

「貴方……本当の名前は、なんていうの？」

かける言葉が見つからず、結局それしか出てこなかった自分が腹立たしい。

本当はもっと、他にいろいろ訊きたいことがあったというのに、いざ実際に対峙してみると、それ以外に言葉が浮かんでこなかった。

しかし、そんな脈絡もない問いに、４号はサムズアップをして答える。

「……クウガ」

そっと、しかし力強い言葉を残し、４号はバイクを走らせる。

女性の耳に、彼の駆るバイクの音が、どこまでも響き渡った――――。

――――――――――――――――――――――――――――

「……さん！　小沢さん！！」

「んあ……？」

壁際に最新鋭の機材が所狭しと並べられた、トレーラーの中。

そこで男の大声に眠りを妨げられ、小沢と呼ばれた女性は大きく伸びをする。

「ああ、氷川君。どうしたの、やけに今日は早いじゃない」

時計を見れば、時刻は６時。

出勤には、まだまだ早い。

「いえ、少しトレーニングをと思いまして。そうしたら、Ｇトレーラーの明かりがついていたものですから」

「なるほどね。でも、無理は禁物よ。Ｇ３は、そう簡単に負けるほど柔に出来てないんだから。何せ、あの？英雄？を模してるんだからね」

「解ってます」

苦笑いする氷川に、よし、と言うと、小沢は目の前のコンソールに向き直った。

昨夜組み始めた――――結局途中で寝てしまったらしいが――

――プログラムのウインドウが開いているのが見える。

「……4号、ですか」

「……ええ」

氷川が呟いた名に、小沢もまた頷く。

4号――――――名をクウガ。

夢にも出てきたその英雄に出会ってから、小沢は必死になって彼の足跡を追った。

尤もそれは、野次馬的な気持ちが働いたからでも、警察官として真実を突き止めなければなどという使命感からでもない。

ただ研究者として、あの英雄の謎を解き明かしてやりたかった。

そうして、対未確認生命体用兵装として誕生したのが、G3システム。

紅い複眼や、特徴的な3本ヅノ。

英雄の姿を受け継いだ、希望の力である。

「今、どこにいるんでしょうね」

「さあね」

素っ気無く答えるが、実は内心、小沢も4号が今どこにいるのか、気にはなっていた。

彼の活躍により未確認生命体が姿を消した後、程なくして彼自身もまたその姿を消していた。

まるで、其の存在は未確認を倒すためだけにあったとでも言うかのように。

「でも、４号がいなくてもアギトがいる。そうでなくても、私達人間自身の力で、これからも戦っていけるわ。だから……」

立ち上がり、小沢は真っ直ぐに氷川を見つめ、言った。

「期待してるわよ、英雄」

はっきりと、そして凛とした眼差しから発せられた言葉。

それに氷川は微笑み、

「……はい」

頷いた。

「よし、それじゃあ焼肉食べに行くわよ！」

「は、え？　朝からですか？」

「何よ。朝から焼肉食べちゃいけないなんて決まりはないでしょ？」

「い、いや、確かにそれはそうですけど……ていうか、朝から飲む気ですか？」

「確か冷蔵庫に肉が……って、何してるの？　行きましょう」

「え、ちょっと待ってください、小沢さんっ！……はぁ」

相変わらずの態度を取りながらトレーラーから出て行く小沢を、溜め息をつきながら、その顔に笑みを浮かべ、氷川が続く。

Ｇ３システム。

その力の原点が、嘗て人類の英雄とされていた男にあることを、知る者は――――――少ない。

（後書き）

どうも皆様、神崎でございます。

いかがでしたでしょうか？
ディケイド超スピンオフで、「Ｇ３はクウガをモデルに作られた」という設定があってかなりびっくりして印象に残っていたことから、小沢さんが一度クウガに会っていて、Ｇ３製作にもそれに大きく影響を受けていたらいいなー、と妄想がすぐさま沸き起こり、今回書かせていただきました。

小沢さんが警察に入ってからの細かい経歴がわからなかったので、夢の中――――――つまりはクウガに会った時点では、対未確認用の開発に手詰まっていた研究員、という設定にしてあります。タイタンフォーム使わせたのは……趣味が半分、勢いが半分。圧倒的な感じにして、とにかく小沢さんに強く印象付けるのが狙いでした。
敵のグロンギに関しては、特に何号とは意識していません。
というのも、アギトは時間軸的にクウガとは別作品であるとのことなので、別にクウガ本編に出たグロンギを無理に出さなくともいいんじゃないかと思ったわけです。

設定に関しましては、こんなところですかね。
あ、もし仮に既にどなたかが公式でこのネタを書かれている場合は、これは僕個人が妄想した結果とお受けとめ下さい。

では、神崎でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6236o/

THE ORIGIN OF G-3

2010年10月31日19時29分発行